

3年生諸君へ①

学校長 角 秀 明

数年前に英国オックスフォード大学のオズボーン博士等によって、20年以内に労働人口の47%が機械に代替可能であるという試算が出されて以来、今ある職業の多くがなくなり、そこを生き抜いていくためには、特にコミュニケーション力や専門性、創造力が必須であると言われている。2000年以降、終身雇用制が崩れつつあることも相まって、安定した（または流行の、高収入のなど、人それぞれの観点からの形容詞を付した）職業を人生で何回も渡り歩くことが主流になっていく。生物の進化の過程でも気候や環境の変化に対応できた種のみ生き残っており、必須3力を身につけ、世の中の変化に対して自身が進化していく事が肝要である。

近年、学校の授業ではICT機器を用いたアクティブラーニング（AL）が取り入れられ、他の生徒とディスカッションや協働することで頭の中を活性化する事が試みられているが、このディスカッションや協働にはコミュニケーション力が大切であり、このALの中で磨かれていく。その際に意識したい点として、「相手の心理・感情を察すること」、「相手の立場で考えること」、「相手の心を満たすこと」がある。自分を見失ってしまったり、主義・主張を一切しなかつたりする必要は無いが、この3点ができれば他者と自分との折り合いを付け着地点を見つけることができる。その積み重ねが協働である。また、その3点を意識してコミュニケーションがとれれば、新商品開発のアイデアも創造できるが、意識しないと単なる出し合い話やおしゃべりになってしまう。学習方法にも不易と流行があるとすれば、ALは流行にあたる。

「不易流行」は、俳聖である松尾芭蕉が「奥の細道」の旅をする頃から説いた理念で、「不易」は変わらないもの、「流行」は変わるものことで、変わらないものを根底にしながら状況に応じて柔軟に変わっていくべきだ、とすることである。その考えに芭蕉の弟子である向井去来が、不易と流行のどちらが欠けてもダメで、昔からの伝統（不易）に基づきつつ、新しいもの（流行）を取り入れて、両方が揃って初めて上手くいくと、自身の概念を付け加えている。

では、学習における「不易」とは何であろうか。それはやはり、「紙と鉛筆」である。ALによってコミュニケーション力が向上することは前述したが、専門性は「紙と鉛筆」によって知識をインプットし蓄積した知識を総動員して試行錯誤しながら、解答としてアウトプットすることで高められる。この地味な行為が多くの人を学習から遠ざける原因であり、嫌々勉強することで脳も拒否反応を示し、学力が向上しない負のスパイラルに落ちいる。就職であれ進学であれ、この「不易」は通らなければならない道であり、どうか、飯高生の皆さんはこれを避けて、できる限り楽しみながら学習してほしいと願っている。

時には、一つの問題に1時間かけて取り組む場面も出てくるが、問題が解けたときには達成感と共に爽快感も得られる。湯川秀樹の「中間子論」やケクレの「ベンゼン環構造」はその最たるもので、研究室でディスカッションすることでコミュニケーション力が向上し、紙と鉛筆によって専門性を深め、それが相乗効果をもたらし、とある日の寝入りっぱなしに世界を驚かすような創造的なアイデアが、夢として現れてきた。飯高生も前述の3力をしっかりと身につけ、自身の人生を開拓して欲しい。飯高生はできると確信している。